

アンソニー・トロロープ作

桜井則子訳

## 自 伝

An Autobiography, by Anthony Trollope, Translated by Noriko Sakurai

### 第一章 教育（一八一五年〜一八三四年）（その一）

この本を書くにあたり、なかなか良い題名が浮かんでこない。仕方がないのでさしたる大仕事もしていない男の「自伝」としておく。ここで、これまでの私の生涯をこまごま書こうとは思っていない。どのような失敗や成功があったのか、その原因はなんであったのか、あるいは作家という職業で口を糊するにはどうすればよいのか、などといったことは、私自身いろいろなところで書いてきたし、他の作家たちがさまざまに書いてきているので、改めて書くまでもないだろう。

そうはいつても、年寄りの話し好きのせいか、ついつい人生を振り返ってしまう人の性（さが）なのか、自分のことを語りたくなってしまふ。またそうでもしなければ、どうやって自分の人生を他人に知ってもらい、理解してもらえるのだろう。私だけでなく誰もが、自分のすべてをさらけ出すなどできはしない。こんなひどい事をしました、と自分から言い出す人がいるだろうか？ まったく悪いことをしなかったといえる者がいるだろうか？ だが、あえて挑んでみよう。嘘はいっさい書かないつもりだ。オテロの台詞ではないが「ありのまま、遺恨を交えずに」お伝えしよう。名誉を語るにしても、それが正々堂々自分の力で獲得したものと見えるからだ。

私の少年時代は、紳士の生まれの若者が自分を不幸せだ、という程度に不幸せだったといえる。貧困と父方の家柄の良さが混じりあって、私の不運は始まった。そして、こういう状況であれば間違いなく経験するはずの苦難に、胸を張って立ち向かう少年らしい勇気がまったく欠けていた。

私は一八一五年にラッセル・スクエアのケッペル通りで生まれ、まだ赤ん坊の時にロンドン北西部のハローに連れて来られた。この地で父が、これは運悪くもいつていいだろう、ノースウィック卿から広大な農場を長期の約束で借りて、家を建てたのだった。この農場は父の希望、野心、成功のすべてを葬る墓場となった。そして母はこのために苦勞をし、子供たちもまたそうだった。この農場こそ、私たち母子の運命を大きく左右する存在となったのだ。

父はウィンチェスター・カレッジの卒業生で、オックスフォードの古い学寮の一つ、ニューカレッジのフェロー（特別研究員）になった。だからウィンチェスターは兄たちと私が当然のこととして進学するはずの学校だった。だが、父の友人にハロー校の教師が何人かおり、また、この学校は教区内に住む子供たちを只同様の月謝で受け入れていた。そのため、生涯を通じて人とは違ったやり方を好む性格だった父は、この怖れ多くも有難い学校をなんと「ウィンチェスターへ行くために準備校」として利用することに決め、息子たちが七歳になると、順にこの学校に送りこんでいた。

この頃の父は法廷弁護士で、ロンドンで開業していた。事務所はオールド・スクエアにあつて、見るからにみすばらしく、人を自殺したい気分させたという。事実、不吉なことに、父の下で見習いをしていた弁護士がこの事務所ですらの命を絶ってしまった。父のことをよく知っている人の話では、父は優秀でとても良心的な弁護士だったのだが、おそろしい癩癩もちで、事務弁護士たちを遠ざけてしまったそうだ。

若いころの父はかなりの財産と、より大きな希望を持っていて、それらが頂点に達したのがちょうど私が生まれた頃だった。この身代であれば、ケッペル通りの家に加えて、田舎に広大な屋敷を持つてもよいのではないかと思いつき、思い通りの屋敷を建てたくて、農場を借りたのだ。父はこの土地を「ジュリアンズ」と名づけたが、とてつもなく広い土地で、ロンドンの方角を見ると、学校と教会のある丘のふもとにまで達していた。ここでやったことは、ほとんどが裏目に出してしまい、農場は破綻した。その当時私たちは地主のノースウィック卿を、わたしたち一家を鵜のように飲み込んでしまつてごうつくばりだと思つていたものだ。

父の得意先は離れていってしまった。チャンセリーレーンや、その周辺の暗く陰気な事務所をあれこれと買い取つてはみたものの、結果はいつも失敗だった。そして最後の強烈な一撃として、父が財産を相続するはずだった年老いたおじが、なんと結婚して跡継ぎとなる子供も生まれたのだ！ ロンドンの家は貸し出され、ハローに建てた家も同じ運命をたどつた。この大きな家から、土地にある農家へと引越して行つた。私はこの農家を「オルレイファーム」という名で、小説を通して読者に紹介しているのだが、私たちが住んでいた当時のまま変わらず、幸いにもジョン・ミレー作の貴重なスケッチで、初版本の口絵を飾ることができた。

兄たちは屋敷のほうからハロー校に通っていたが、おそらく貴族的な生徒の集団のことだ、対等に受け入れてもらつてはいなかっただろう。なぜなら当時は、ハロー校に寄宿せずに自宅から通う生徒は、けつして平等に受け入れてはもらえなかったのだ。しかし、少なくとも、ほかの通学生たちと同じ扱いだったようだ。兄たちの受けた待遇がよかったとは思わないが、私が耐えた屈辱と同じ目にあつたかどうかは疑問だ。私は七歳だったが、今の時代の七歳児であれば、上級生はもつと思いやりがあり、優しく扱ってくれたはずだが、その頃の私はまったく容赦されなかった。学校と家の間を走つて往復する時さえ、何かしら辛い事がいつも待ち受けていた。

私の外見が不利に働いていたことは間違いない。よく覚えているが、まだ初等生だった頃、校長のバトラー先生が道で私を呼び止め、雷様のように眉をひそめ、雷鳴のようにとどろく声で、「お前のよつにみつともない汚い子供のお陰で、われらがハロー校の名がけがされるとは、いったい何の因果だ、許し難い」とどなりつけてきた。ああ、その瞬間の私の気持ちといったら。しかし、自分の気持ちから目をそむけるしかなかった。私が汚かったのは確かだが、それにしても校長は心の冷たい人だったと思う。校長は私を鞭で打つのが習慣になっていたから、そういう時にしょっちゅう目にした私の姿が、こつを覚えていたのだろう。顔を見て気がついたというよりも、私の汚れっぷりで気づいたのだと思う。

この時、私は二年間ハロー校に通っていた。この学校を去ったのは、記憶にある限り、まだ初等生の頃だった。

それからアーサー・ドルリーが経営するサンベリーの私立学校に転校した。こうなりたいきさつはおそらく、ヘンリー・ドルリーの助言があったからだろう。彼は父の友人であり、ハロー校で私のチューターをしていたので、「アンソニーの力がハロー校ではどうも伸びなやんでいる」とでも父に伝えたのだろう。サンベリーに移りそこで過ごした二年の間、小遣を手にしたことはなく、着るものだっていつも足りなかったが、私のかなり長かった学生生活の中で、他の少年たちと一番対等な立場で過ごせた時期だった。とはいえ、嫌われ者であることに変わりはなかった。

ひどい悪戯が発覚した時のことだ。今でもよく憶えているが、犯人が誰かはつきりしないのに四人の生徒が名指しされた。そして、なぜなのか今日にいたるまで真相はわからないが、私はその中の一人に入っていた。赤ん坊のように無垢なのに、なんと首謀者と思われていたのだ。

それぞれが罰として説教を書かされたが、私への割り当てが一番長かった。その学期中食事のたびに四人は一番後回しにされたし、説教を仕上げるまでは運動場に出ることも許されず、ようやく自分の分を書き終えたのは学期が終わる直前だった。ミセス・ドルリーは私たちを見るたびに、哀れみ、手に負えないという様子で首を横に振るし、それ以外にもいやというほどの罰が次々と科された。とにかく胸が張り裂けそうだった。なにしろ身に覚えのない罪だったのだ。もう一つ、負けず劣らず悔しかったのは、不良に間違いない後の三人がこの学校の「生まれも育ちも良い貴公子達」であり、自分達の悪巧みの仲間になんかを誘い込むなんてありえなかった事だ。

ドルリー校長が漏らした言葉から考え合わせると、「こいつはハローのよつな由緒ある学校から転校させられたのだから、悪い事を率先してやるに違いない！」という偏見から私を犯人と決めつけたのだ。次の学期の初日に「やはり思い違いだっただかもしれないな・・・」と小声でつぶやいたが、間抜けな少年にありがちな鈍さから、何も答えなかった。そして校長もそれ以上あやまちを正す勇氣を持ち合わせていなかった。すべては五十年も昔の話だが、まるで昨日のことのように怒りがこみ上げてくる。卑劣で弱虫

なあいつらは少なくとも私については真実を話していないに違いない！名前は今でもはつきりと憶えている。ここに書いてやりたいくらいだ。

十二歳の時ウィンチェスター・カレッジに欠員が出て、私の入学が認められた。兄たちはもつと前に移っていたが、すぐ上の兄はニューカレッジへ進める見込みがないと思われ、すでにやめさせられていた。父がその生涯に抱いた夢の一つは、息子達がウィンチェスターで学ぶようになり、そこから全員がニューカレッジに受け入れられてフェローになることだった。しかしこの不運な人物は自分の願いがかなうようには生まれついていなかった。子供達が奨学金を得て、何とかニューカレッジへ進めるようにと、できるかぎりの事をしてくれたが、だれもそれを達成できなかった。

長兄はウィンチェスター卒業生としての最高荣誉はのがしたものの、三つの奨学金を学校から授かり、後にオックスフォードで学んだ。そして多方面にわたるイタリア関連の書物の著者として世間に名が通るようになった。私がこれを執筆している今も元気だ。しかし、もつひとりの兄は若くしてこの世を去った。

私がウィンチェスターに行っている間に、父の仕事はどんどん悪い方向に進んでいった。弁護士事務所を閉じてしまい、因果なことに別の農場を借りてしまったのだ。何ともつじつまの合わない話だが、高い教育を受け実に頭の良い父が、どういつわけか農場経営が特別な知識や経験なしに金を稼げる仕事だと思い込んでいたようだ。おそらくあらゆる職業の中でこれほど、何をどうすべきかについての正しい知識と経験がものをいう仕事はないだろう。そして成功するには十分な元手も必要だ。父には知識もなく、そしてこの二つ目の農場を借りた時には元手さえなかった。これがついに破滅する前に父が踏んだ最後の一步だった。

私がウィンチェスターに転校して間もなく、母は次兄と、まだ幼かった二人の妹を連れてアメリカに旅立った。一八二七年の事だったと思う。彼女の、そして父の目的が何だったのかはつきりとは分からないが、まだ物が不十分なアメリカに、針刺しや、胡椒入れ、ペーパーナイフのような小物でも持ち込めば金儲けが出来るかもしれない、といったアイデアを父が持っていたのだと思う。母は西部の町に雑貨売り場かそれを拡張した店でも建てれば、兄ヘンリーの事業のきっかけになるかもしれないと考えたのだろう。何処から資金を調達したのか見当もつかないが、ペーパーナイフや、胡椒入を仕入れ雑貨屋は完成した。シンシナティの町に行った時に見たが、何ともおそまつな建物だった！でも、この頃のものとしては立派だったそうだ。

最初に母が妹達と次兄を連れて出発し、その後父がオックスフォードに入学する前の長兄を連れて続いた。しかしそれは一年半ほど経ってからのことで、長兄と私はこの一年半を共にウィンチェスターで過ごしていた。

郵政省で事務職を得、大人の仲間入りをして以来四十年間、私と兄のトーマス・アドルフアスはずっと親友同士だ。お互いに激しく言い合ったこともあるが、確固たる友情があればそれに耐え、許しあえるものだ。これほど強い絆で結ばれた兄弟はそうはいな

いだろう。けれども学生時代、兄は私の敵の中でも最悪の敵だった。

学校のならわしで下級生は上級生に勉強を教えてもらう。少なくとも当時はそうだったので、兄は私のチューターだった。そして教師および支配者として彼が手本にしたのは、古代アテネの執政官「ドラコン」だった。この厳格な立法者の発布した過酷な刑法をまねて、兄が服従を強いるためにどんな言い方をしたかは忘れられない。「りんごを盗んだ子供を首吊りにすれば、他の子供は盗みをしなくなる」とよく言っていた。その説はすでにどこかで論破されていたが、兄は保守的なエネルギーでそれにしがみつき、その結果、日課として太い棒で私を打ったのだ。私にいわせれば、このような体罰が日課になるようだったら、それはその学校の規律の悪さを物語るものだ。

( つづく )